こま

小川未明

青空文庫

赤地の原っぱで、三ちゃんや、徳ちゃんや、勇ちゃんたちが、輪になって、べいごまをまわしていました。

赤々とした、秋の日が、草木を照らしています。風が吹くと、草の葉先が光って、止まっているキチキチばったが驚いて、飛行機のように、飛び立ち、こちらのくさむらから、あちらのくさむらへと姿を隠したのでした。

けれど、一同は、そんなことに気を止めるものもありません。熱心に、こまのうなりに、瞳をすえていました。

この時刻に、学校の先生が、この原っぱを通ることがあります。みんなは遊びながらも、なんとなく、気にかかるのでありました。見つかれば、しかられやしないかと思うのであるが、また、こんなことをしたっていいという考えが、みんなの頭にもあったのであります。

三人が、夢中になっているところへ、

「おれも入れてくれないか?」と、ふいにそばから、声をかけたものがあったので、びっくりして顔を上げると、それは、黒眼鏡をかけた紙芝居のおじさんでした。

「おれも仲間に入れてくれよ。」と、おじさんは、遠慮しながら、いいました。

「おじさんも、べいをやるのかい。べいを持っているの。」と、勇ちゃんが、ききました。

「ほら。」といって、おじさんは、ズボンのかくしから、光ったべいを出して見せました。

「角のケットンだね。」と、徳ちゃんも、三ちゃんも、たまげたようにに、おじさんのべいに目を光らせました。

「おら、子供の時分から、こまをまわすのが、大好きなのさ。」

おじさんは、三人の間へ割って入るとかがみました。そして、むしろの上を見ていたが、

「だれのだい、あのダイガンは?」

「あのベタガンは、三ちゃんのだよ。」

「おれは、あいつがほしいものだなあ。」と、黒眼鏡のおじさんは、子供のように、三ちゃんの大きなべいに見とれています。

「おかしいなあ、大きなりをして、べいをするなんて……。」と、徳ちゃんは、おじさんの顔を見て、げらげら笑い出しました。

「なにが、おかしいんだい。おら、子供の時分から、こまは好きなんだよ。それは、こんなのでなくて、木のこまに、鉄の胴をはめたんだ。その鉄の厚みが広いのほどいいとしたもんだ。あの、三ちゃんのダイガンを見ると、おれの持っていた、鉄胴のこまを思い出すよ。」と、おじさんは、いいました。

「その鉄の胴をはめた、こまをどうしたの?」と、勇ちゃんが、聞きました。

「こっちへくるときに、友だちにやってしまった……。なにしろ、十五の暮れに出てきたんだものな。あれから十年も故郷へ帰らないのだ。」

「それで、おじさんは、こっちへきても、べいをしていたのかい。」

「じょうだんな、そんな暇があるかい。小僧をしたり、職工になったり、いろいろのことをしたのさ。この商売をするようになって、昔、こまをまわしたことを思い出して、ときどきべいをするが、おもしろいなあ。」と、おじさんは、子供といっしょに遊ぶのが、

なにより楽しみだといわぬばかりに、にこにこしていました。

「さあ、やろうよ。」

「よしきた！　しんけんべい。」と、おじさんが、叫びました。

カチンと、みんなが、手から繰り出した、鉄砲だまのようなべいは、たがいにはじき合って、火花を散らしました。おじさんのべいは、なかなか強く、輪を描いては、うなりながら、三人のべいをはね飛ばしてしまいました。

「おじさんの角は、すげえな。」と、三ちゃんは、白目を、くるりとさせました。

「そうさ。お宮の石垣や、コンクリートの道で、みがいたんだものな。このべいには、だれにも負けないという信念が入っているのだ。天下無敵というやつさ。」

黒眼鏡のおじさんは、三ちゃんのダイガンを負かすと、てのひらでなでまわして、喜びました。

「みんな、あすこの草の上へいって、寝転ぼうよ、あめをやるから。」

おじさんは、そういって、自転車についている箱から、あめを取り出してきて、みんなに分けてくれました。

仰向けになって、高らかな空を見上げると、しみじみと秋になったという感じがしました。小羊のような、白い雲が、飛んでいくのを見送りながら、三人は、思い思いに、おじさんの話を聞いていました。

「村に女の子で、お時といって、おれとおなじ年の子があって、こまもまわせば木登りも上手だった。隠れんぼをすると、お時は、ぞうりをふところに入れて、家の前にあった大きなしいの木に登ったものだ。風があって、枝が、ゆらゆら揺れているのに、てっぺんまで上るのだから、だれも見つけたものがなかったのだ。男の子とけんかをしても、泣いたことのない勝ち気な子だったが、どうしたろうか。」

子供たちは、もうおじさんの話を聞いていませんでした。

「おじさん、また明日おいでよ。こんどは、僕が敵討ちをして、おじさんの角を負かしてしまうから。」と、三ちゃんが、いいました。

「ああ、いいとも。みんな待っていな。」と、黒眼鏡のおじさんは、帰っていきました。その夜、月は、みがきたての鏡のように明るかったのです。昼間子供たちの遊んだ、赤地の原には、虫の声が、いっぱいでありました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集　12」講談社
　　1977（昭和52）年10月10日第1刷発行
　　1982（昭和57）年9月10日第5刷発行
底本の親本：「日本の子供」文昭社
　　1938（昭和13）年12月
初出：「小学四年生」
　　1937（昭和12）年10月
※初出時の表題は「独楽」です。
入力：特定非営利活動法人はるかぜ
校正：酒井裕二
2017年12月26日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

こま

小川未明

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/